

What's New

研究プロジェクト

「沖縄ヤンバルの森林の生物多様性に及ぼす人為の影響の評価とその緩和手法の開発」の
紹介

九州支所 佐藤 大樹

沖縄本島北部の山原（やんばる）と呼ばれる地域には、ヤンバルクイナ、ノグチゲラ、ヤンバルテナガコガネのような世界でこの地域の森林だけに生息する生物学上貴重な動植物が分布しています。同地域を世界遺産に向けて登録しようとする動きもあり、生物の保護、環境の保全という視点が重要視されています。一方、やんばるでは古くから森林資源を利用して人々が生活しており、山林と共存しているという事実も存在します。森林に手を入れれば、そこに生息する生物はどのような影響を受けるのでしょうか。開発が行われる社会背景はどのようなものでしょうか。島という限られた面積の中で、折り合いをつけられないのでしょうか。

そこで、森林総合研究所と琉球大学の共同研究としてスタートした表記プロジェクト（環境省 地球環境保全等試験研究費 H17-21）では、沖縄県立博物館および沖縄県林業試験場にもご協力いただき、自然科学系と社会科学系の研究者の合同作業で生物の多様性の現状および森林利用の履歴を調査解析しています。

まず、有用樹種を残してその他を伐採するなどの林業的な行為（育成天然林施業）が、そこに住む生物の多様性に与える影響を調査し、施業後の経過年数によって多様性がどのように変化するかを解明します。たとえば、施業後5年、10年経過したとき、施業当時いなくなった動植物は帰ってくるのか、こないのか。続いて、林道を設けた時に林道からどの程度奥まで生物の多様性が影響を受けているかを調査します。施業や林道開設、これらの人為の影響を測定するために、複数の定点調査地を設定し、脊椎動物、植物、菌類、昆虫、土壌動物を対象として総合的に試料を収集し解析します。特定の種についての調査は沖縄で数多いようですが、複数の分類群を対象に定点調査することは、本研究のひとつの特徴です。生物はどのようにつながり、人為が加わるとそのつながりのどの部分が変わるのかというメカニズムの解明が基礎的研究要素として重要だと指摘を、環境省から受けています。これは、今後の林業を考える上でも重要な視点です。

生態系を対象とした上記の研究と並行して、森林利用にかかわる社会経済的解析を行います。これは本プロジェクトのもうひとつの特徴です。やんばるの土地利用の変遷とその社会背景はどのようなものでしょうか。関係資料の入手および聞き取り調査により、やんばるの過去の森林利用について解析を行います。本プロジェクトは、生物学的研究そして社会経済的研究、これらを統合してやんばる地域の人為の影響の推定地図を作成し、この地域の森林の管理の手法について提言することを目的としています。

この研究のためには、多くの関係諸機関との密な連絡体制が不可欠です。現在、国頭村役場を始め、国頭村森林組合、沖縄県庁、同県北部林業事務所、同県公文書館、環境省那覇自然環境事務所、同省やんばる野生動物保護センター、林野庁九州森林管理局、同局沖縄森林管理署に連絡をとりながら進めています。記してご協力に感謝申し上げます。



写真 ヤンバルクイナの親子
(自動撮影装置使用、2005年5月31日21:57)